

昭和初・中期北京語語音における仮名表記の改善 — 『支那語四週間』を中心に —

孫 云偉

SUN Yunwei

提要：『支那語四週間』は日本昭和初期編撰的用仮名注音の北京語教科書、與前代同類型北京語教科書相比、在注音方式上、既有繼承亦有發展、它們都採用假名注音、但明治時期的假名注音主要是追求發音相似、昭和初期的假名注音則更加精確、對介音等的描寫較前有一定進步。較之昭和初期之前的這一類教科書、昭和中期編撰的『中国語四週間』則又完全不同、雖仍是假名注音、但其已經涉及變調、兒化、多音字等、更接近現代漢語教科書。

目次

1. はじめに
2. 『支那語四週間』について
3. 『支那語四週間』における北京語語音の改善
4. 『中国語四週間』（改訂版）の改善
5. おわりに

1. はじめに

『支那語四週間』¹は宮島吉敏が著した注音字母、ローマ字表記、仮名表記を全て収録している北京語音声教科書である。昭和6年(1931)に東京で出版され、発行所は大学書林である。『支那語四週間』は初版、重版、改訂版を合わせて、約180版を発行された。『中国語四週間』²は『支那語四週間』の改訂版であり、昭和28年(1953)に東京で出版された。両書は共に声母、韻母を仮名でその発音を表記した上で、発音方法を説明している。本稿では『支那語四週間』と『中国語四週間』を研究資料とし、その仮名表記を研究する。また、筆者が書いた『明治期北京官話教科書「官話指南」及び学習補助教科書の総合研究』(2019)の中に、明治13年(1880)から大正15年(1926)までに7冊³の北京語音声教科書の仮

¹ 『支那語四週間』の表紙には「四個星期中華國語」とも書かれている。本稿では便宜上『支那語四週間』に統一した。

² 『中国語四週間』の表紙には「四個星期中国話」とも書かれている。本稿では便宜上『中国語四週間』に統一した。

³ 7冊の北京語音声教科書はそれぞれ広部精が著した『亜細亞言語集 支那官話部』(1880)、田中正程が著した『英泃會話独案内』(1885)、川崎華が著した『英和支那語学自在』(1885)、鄭永邦と吳大五郎による共著した『日漢英語言合璧』

名表記を考察した。本稿では拙稿(2019)の研究を踏まえ、宮島大八が著した『支那語独習書』(1900)、西島良爾が著した『最新清語捷徑』(1906)、足立忠八郎が著した『北京官話日清商業會話』(1909)の三書を加え、それらの教科書の仮名表記を『支那語四週間』と比較し、明治時代から昭和初期までに北京語音声教科書に付した仮名表記はどのような改善があるか明らかにしたい。また、『中国語四週間』は昭和中期のものとし、従来の北京語音声教科書と比較し、その優れた点も検討する。

2. 『支那語四週間』について

(1) 『支那語四週間』の構成

『支那語四週間』は緒言、目次、本文から構成され、全252頁となる。本文は四週間を分けて、四部分から構成している。第一週では「二十四聲母」、「介母」、「韻母」、「四声」、「重念」を説明した上で、「基本文章」である数詞、助数詞、指示形容詞、人称代名詞、場所の副詞などのような品詞を学習する。第二週は同じく「基本文章」を学習する。第三週、第四週は「白話篇」を学習する。この四週間の教授内容から見ると、第一週と第二週は基礎篇で、第三週と第四週は応用篇と言える。また、全書の用例、白話文の上には仮名でその漢字に対応する読み方を表示している。しかも、難解語彙に対する「注解」、文章に対する翻訳も提示している。

(2) 声母の仮名表記

『支那語四週間』の本文には二十四声母、介母、韻母に対応している仮名表記、発音方法を表記した上で、「北京音全表」も提示した。その「北京音全表」は国際音声記号、注音字母、ローマ字表記のみ表示し、対応する仮名表記を収録されていない。また、『支那語四週間』の本文は声母を調音部位によって分類し、その仮名表記は以下の通りである。

「雙唇音(或重唇音)」b, pはハ行の濁音、mはマ行に対応している。「唇齒音」fは「フー」、「舌尖音」d, tはタ行、nはナ行、lはラ行に対応している。「舌後音」g, kはカ行、hはハ行に対応している。「舌前音」j, q, xはそれぞれ「チー」、「ヂー」、「シー」に対応している。「舌葉音」zh, ch, sh, rはそれぞれ「チー」、「ヂー」、「シー」、「リ」に対応している。「舌齒音」z, c, sはそれぞれ「ツー」、「ゾー」、「スー」に対応している。また、『支那語四週間』ではウェード氏のローマ字表記にない、現代漢語にもない声母「ㄐ(ゴー)」、「ㄋ(ニー)」、「ㄌ(ウー)」⁴も提示した。特に声母「ㄐ(ゴー)」を紹介する際、「北京には此音が無い」と記述しているのに、本文に収録された理由は不明です。

(3) 韻母の仮名表記

『支那語四週間』の本文では単母音、複母音、鼻母音の順で韻母を説明した。その仮名表記は以下の通りである。

単母音 a, o, e, i, u, ü, er はそれぞれ「ア」、「オ」、「イ」、「ウ」、「ユ」、「アル」に対応している。複母音 ai, ei, ao, ou, はそれぞれ「アイ」、「エイ」、「アオ」、「オウ」に対応している。鼻母音 an、

(1888)、鄭永邦が著した『北京發音反切表』(1904)、鄭永邦と吳大五郎による共著した『日清英露四語合璧』

(1910)、飯町道雄が著した『官話指南自修書』(全3冊1924~1926)となる。

⁴ 「北京音全表」の発音表説明により、声母 p, n, w は「萬國音標文字」に収録されている。

en, ang, eng はそれぞれ「アンㄣ、エンㄣ、アンㄥ、オンㄥ」に対応している。また、介母を紹介する際に、i, u, ü は声母にあつてはそれぞれ「イア、イオ、イアオ、イウ、イン、イアン」、「ウア、ウアイ、ウエイ、ウオン、ウアン」、「ユエ、ユアン、ユイン」のように表記すると述べた。また、「yo ヨ」と「yai ヤイ」はウェード氏のローマ字表記の中に収録されているが、現代漢語拼音にはすでに消えた発音である。著者宮島吉敏は「yo ヨ」と「yai ヤイ」を韻母のところに収録したが、『支那語四週間』の本文にこのような音節がない。

以上、『支那語四週間』はウェード氏のローマ字表記を利用しているが、当時ではより古い発音「yo ヨ」、「yai ヤイ」を削除したことから、その仮名表記を改善した箇所があると言える。また、北京語音声教科書の中では最初に声母と韻母で別々に仮名表記を付したものは鄭永邦が著した『北京發音反切表』（1904）である⁵。この後に岡本正文が著した『CHINESE SOUND TABLE』（1904）もあるが、『支那語四週間』は注音字母、トーマス・ウェード氏のローマ字表記、仮名表記を全て収録している北京語音声教科書である。昭和初期では声母と韻母どのような仮名で表記しているのかを考察するのに役立つものと考えられる。

3. 『支那語四週間』における北京語語音の改善

本稿では『支那語四週間』と前述した 10 冊の仮名表記を付した北京語音声教科書の比較研究を通し、その改善は以下のようにまとめられる。

(1) 単母音 a

前述した 10 冊の北京語音声教科書である『亞細亞言語集 支那官話部』から『北京官話日清商業会話』までは、pa, ba, na, ga, ha などのように声母と単母音 a を綴る際、ほぼ「怕パー」、「巴バー」、「那ナイ」、「嘎カー」、「哈ハー」で表記しているが、『支那語四週間』はそれぞれ「怕パア」、「把バア」、「那ナア」の仮名で表記していることが多い。『支那語四週間』の声母、韻母の仮名表記から見ると、声母 p と韻母 a はそれぞれ「パ」、「ア」に対応している。よって、このような表記はおそらく、声母、韻母を別々に仮名で表記する影響を受けていることがうかがえる。しかも、声母、韻母を一々に対応し、このような表記方法は最も適切な北京音を発することができると考えられる。

(2) 介母 i

従来の北京語音声教科書を見ると、仮名で音節を表記する際、介母 i は一つの音素として表記することがそれほど多くない。本稿では 10 冊の北京語音声教科書を『支那語四週間』と比較し、代表的な音節を取り出し、以下のように整理できる。

表1 各北京語音声教科書における介母 i の仮名表記の諸相

⁵孫云偉 2019 : 219 頁。

音節 教科書 ⁶	qian	tian	iao	xia	xian	dian
『言語集』	欠チエン	天テ・エン	要イヤヲ	夏シヤー	先シエン	店テ・エン
『独案内』	錢チエン	天チン	要ヤウ	要ヤウ	先シエン	點デン
『学自在』	千ちにん	天てん	腰やあう	下しやー	先しにん	電テーん
『語言 合璧』	前チエ ^ヌ	天チ エ ^ヌ	藥ヤウ	夏シヤー	線シエ ^ヌ	點チ エ ^ヌ
『独習書』	千チィエン	天テエン	鑰ヤオ	下シイヤ	現シィエン	電テエン
『反切表』	ィエ ^ヌ	ィエ ^ヌ	アオ	シーア	ィエ ^ヌ	ィエヌ
『清語 捷徑』	鉛チエン	天テン	要ヤオ	下シヤー	羨シエン	調テヤオ
『商業 会話』	千チエヌ	天テエヌ	藥ヤオ	夏シヤー	現シエヌ	點テエヌ・
『四語 合璧』	前チエ ^ヌ	天チ エ ^ヌ	藥ヤウ	夏シヤー	線シエ ^ヌ	點チ エヌ
『自修書』	千チエヌ	天テエヌ	藥ヤオ	下シア	線シエヌ	點 テエヌ
『四週間』	千チィエン ヌ	天ティエンヌ	要ィアオ	下シィア	現シィエンヌ	點ティエヌ

表1を見ると、『支那語独習書』、『北京發音反切表』、『支那語四週間』の介母iは仮名の「ィ」で表記した音節があるが、『支那語独習書』、『北京發音反切表』は介母iの表記について徹底的に実施されていない。これはおそらく介母iを一つ音素とし表記するという傾向が出はじめたと推測できる。一方、『支那語四週間』では多くの場合、仮名の「ィ」で介母iを表示したことから、著者宮島吉敏は音素までに表記することが重視しているとわかる。しかも、このような表記は、その発音の正確性をより高められると思われる。著者は学習者に正確な北京語を話せるように大いに工夫したことがわかる。

(3) 「撮口呼」u

「撮口呼」uについて、『亜細亞言語集 支那官話部』では符号「#」で表している⁷。『英清会話独案内』は「撮口呼」uだけではなく、「禧シ#」、「拜バ#」、「北ベ#」、「回ホ#」、「壞ホウ#」のような韻母i、ai、ei、ui、uaiの場合にも用いている。要するに、『英清会話独案内』では符号「#」の使い方がまだ統一さ

⁶ 表1と表2の教科書は『亞細亞言語集 支那官話部』、『英清会話独案内』、『英和支那語学自在』、『日漢英語言合璧』、『支那語独習書』、『北京發音反切表』、『最新清語捷徑』、『北京官話日清商業会話』、『日清英語四語合璧』、『官話指南自修書』、『支那語四週間』の順で提示した。

⁷ 『亜細亞言語集 支那官話部』において符号「#」は句(チコ#)、取(チコ#)、須(シコ#)のような韻母uの場合に付している。

れていないと言える。また、『支那語四週間』は『日漢英語言合璧』、『日清英露四語合璧』のように「…」という補助符号を使用した。しかしながら、『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』は「女ニー」、「雲イヌ」、「月ユエ」のように符号「…」を最初の仮名の上に付した。『支那語四週間』は「巡シユン」、「学シユエ」のように韻母の所に符号「…」を付した。それらの表記から、『支那語四週間』はこの補助符號「…」を使用した場合、「撮口呼」を際立たせ視覚的に識別しやすく、学習者にメリットがあると考えられる。

(4) 鼻音韻尾

『支那語四週間』の前鼻音は「-n ンヌ」、後鼻音は「-ng ング」と表記している。このような表記の仕方はどのような特徴があるか、及び鼻音韻尾表記の傾向性を考察するため、前述に挙げられた10冊の北京語音声教科書を調査資料として、「各北京語音声教科書における鼻音韻尾の諸相」(表2)を作成した。

表2 各北京語音声教科書における鼻音韻尾の諸相

韻母 教科書	an	in	en	ang	ing	eng
『言語集』	半パン	貧ピン	跟カン	幫パン	寧ニン	朋ボン
『独案内』	板バン	您ニン	甚セン	堂タン	明ミン	更カン
『学自在』	半ばん	品びーん	肯かこん	綁ばん	明みん	更かを
『語言合璧』	半パヌ	蘋ピヌ	跟‘ケヌ	盪タン	名ミン	更‘ケン
『独習書』	半バン	今チイン	men メン	响シヤヌ	明ミヌ	程チヨヌ
『反切表』	アヌ	イヌ	イエヌ	アン	イン	エン
『清語捷徑』	單タン	音イン	門メン	商シヤヌ	性シヌ	生シヨヌ
『商業會話』	甘カヌ	心シヌ	門メヌ	行ハン	定テン	風フォン
『四語合璧』	半パヌ	蘋ピヌ	跟‘ケヌ	糖タン	明ミン	更‘ケン
『自修書』	伴パヌ	聘ピヌ	肯ケヌ	幫パン	敬チン	碰ペエン
『四週間』	完ウアンヌ	今チインヌ	門メエンヌ	商シアング	晴チイング	生シオング

表2から見ると、『亜細亜言語集 支那官話部』、『英清會話独案内』は共に前鼻音-nを「ン」、後鼻音-ngを「ン」、『英和支那語学自在』は平仮名の「ん」で前後鼻音を表記している。『日漢英語言合璧』、『北京發音反切表』、『日清英露四語合璧』、『官話指南自修書』、『北京官話日清商業會話』は前鼻音-nを「ヌ」、後鼻音-ngを「ン」で表している。『支那語独習書』、『最新清語捷徑』は前鼻音-nを「ン」、後鼻音-ngを「ヌ」で表している。明治期の中国語教科書では、『支那文典』

(1877)のみ「ング」で後鼻音-ngを表している⁸。また、『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』の「凡例」には後鼻音-ngの発音が日本語の「グ」の音に近いと記述している。よって、これは『支那語四週間』の後鼻音-ngを「ング」で表記した理由なのであろう。また、表2を見ると、『支那語四週間』は他の北京語音声教科書と違い、「完ウアンヌ」、「今チインヌ」、「晴チイング」、「門メエンヌ」の仮名表記から、韻母「an」、「in」、「ing」の「a」と「i」の音も読み取れた。このような表記方法は元の北京音と非常に類似し、その正確性もより高められると思われる。

4. 『中国語四週間』(改訂版)の改善

『中国語四週間』は『支那語四週間』の改訂版であり、鐘ヶ江信光によって改訂し、昭和28年(1953)に東京で出版された北京語音声教科書である。『中国語四週間』の「諸言」によると、「四週間システムに立脚しつつ、前著とは全然別の新しいもの」と述べた。そのために、各章の配置は『支那語四週間』と同じであるが、基礎篇では四声、声母と韻母を提示した上で、軽声、重念、多音字⁹、アル化音を加えて説明している。応用篇の文例は「五四運動以後の中国の代表的作家の作品」を選んだ。また、『中国語四週間』の本文に入る前に、「中国語を学ぶ人々のために」の節があり、そこは「中国の発音表示法」であるローマ字表記、反切注音、注音符号、国語ローマ字、ラテン化新文字を提示した。本文の内容を見ると、著者は改訂する際にいくつかの箇所が上述の「中国の発音表示法」を参考した。本節は、『中国語四週間』の優れた点を明らかにするために、前述した10冊北京語音声教科書、及び『支那語四週間』との比較を行い、その改善の箇所は以下のようにまとめられる。

(1) 四声と変調

仮名表記を付した北京語音声教科書である『亜細亜言語集 支那官話部』から、漢字の四隅に圈点をつけて四声を表した北京語音声教科書は数多くが、『中国語四週間』は仮名表記の右に民国11年民国の教育部に正式に採用された「^ˊ、^ˋ、^{ˊˊ}、^{ˋˋ}」の符号を用い、四声を表示している。しかも、『中国語四週間』のように四声の発音方法までに詳しく説明し、より理解しやすい発音描写が少ないと思う。『日漢英語言合璧』、『日清英露四語合璧』¹⁰はより詳細に四声の発音描写をしているが、読者にとって理解しづらい¹¹。それに対して、『中国語四週間』において四声の発音描写は例を挙げながら説明するのがより理解しやすいと思う。その発音法について以下のように描写している。

⁸ 張照旭 2014、119頁。

⁹ 『中国語四週間』では「多音字」を「破音」といい、本稿は便宜上、「多音字」と称する。

¹⁰ 両書は四声に関する発音描写は「詩韻ノ五聲トハ、悉トク相叶ハズト雖モ。此四聲ヲ正サシメバ、言語ノ腔調ヲ成サズ。例へば哀ハ上平。埃ハ下平。矮ハ上聲。愛ハ去聲。此四字音ヲ同フシテ聲ヲ異ニセリ。其別只タ發聲ノ輕重緩急ニ在リ。例へば。上平ハ(ア)音ヲ重發シテ。急ニ(イ)音ニ止ム。恰カモ我應詞ノ調ニ彷彿タリ。下平ハ(ア)音ヲ輕發シテ。(イ)音ヲ抑フ。猶ホ染料盤玉ノ發音ニ近シ。上聲ハ平調ノ(ア)音ヲ緩ヤカニ發シ。(イ)音ニ止ム。即チ(ア-イ)ト附音スベキカ。去聲ハ高調ノ(ア)音ヲ極メテ強ク發シ。(イ)音ヲ以テ急ニ止ム。即チ(アアイ)トモ附音スベシ。」となる。

¹¹ 孫云偉 2019 : 225頁。

第一声は全体に平かに（高低なく）、音階は他の三つよりも幾らか高い、日本語の「お口をアーンと開けてごらん」と言う場合の「アーン」の調子、あれが第一声の調子です。

第二声は尻上りの調子で、かんで「ナーニ、大丈夫ですとも！」と言う場合の「ナー」の尻上りの調子。

第三声は先ずすぐく低く出した音をそのママ延ばして最後に軽く尻上りになる調子で、日本語の驚いた時又は小馬鹿にした時の調子の「ヘエエ！そうですかねえ」の「ヘエエ」の調子、又がっかりした時の「アア！」と言う調子。

第四声は発音と同時に低く下げる調子で、大体第二声の逆になる「アイロン」「ナイロン」などの「アイ」「ナイ」に相当する。

また、『中国語四週間』は「一」の変調、三声が二つ続く場合の変調、軽声、重念、多音字、アル化音までも説明している。例えば、軽声は「妈妈マ（^レ）マ」、「妹妹メイ（^レ）メイ」、「姐姐「チエ（^レ）チエ」のように表している。前述した北京語音声教科書の中に重念、軽声はより多く提示したが、『中国語四週間』のように軽声まで詳細に紹介し、その表記は現代漢語と全く同じ北京語音声教科書がない。このような表記方法は従来の北京語音声教科書より理解しやすいと思われる。

(2) アル化音と多音字

アル化音について、数多くの北京語音声教科書が提示したが、その説明と表記は不適切な箇所が見える。前述した教科書の中にアル化音の表記を施した教科書は『日漢英語言合璧』、『北京發音反切表』、『日清英露四語合璧』の三書しかないが、その説明はアル化音の重要点である前の字の音尾を消滅するという説明がない。『日漢英語言合璧』と『日清英露四語合璧』はアル化音について以下のように述べた。

孩兒二字ノ如キ。其字音ヲ分テバ、(孩兒) トナルモ。言語ノ勢ニ於テハ、(ハル) ト成ル。此他一點兒ハ (イチ^イ エール)。個個兒ハ ('^イコーコル) 等。

このような説明を見ると、アル化音は一体どんなものか理解しづらいと思う。しかしながら、『中国語四週間』では「孩兒 hái érh」、「今兒 chīn érh」を「hárh (ハル)」「chīrh (チル)」のように音尾を消滅するということを提示した。このことから、著者鐘ヶ江信光は接尾語としての「兒」が音節として独立せず、前の音節と一音節として、発音する際にその語尾が巻舌音化することは意識していたと思われる。

また、多音字について多くの教科書に提示していないが、本文では多音字がある場合、その読み方がほぼ正確に表記している。『中国語四週間』の本文では、「中国語の音韻の中で、〈一字一音一声〉が原則だといったが、一つの文字が二音或いは三音を持ち」と述べた。このような説明を見れば、外国人中国語学習者は意識的に注意を喚起できることがうかがえる。

以上のことから見ると、昭和中期において四声の発音描写はすでに現代漢語に近く、著者鐘ヶ江信光は日本人中国語学者が理解しやすい発音描写と正確な北京語を習得させるために、工夫された面が見て取れる。また、『中国語四週間』は『支那語四週間』にない変調、多音字、アル化音、軽声、重念まで

追加し徹底的に説明して、その発音方法も紹介していることから、昭和中期の日本人中国語学習者はすでに変調、多音字、軽声などの重要性を意識していたと思われる。しかも、この変化は注音符号、国語ローマ字、ラテン化新文字の影響を受けていると考えられる。

5. おわりに

本稿は明治時代から昭和初期までに10冊の仮名表記を付した北京語音声教科書を用い、『支那語四週間』、『中国語四週間』との比較研究を通し、以下の結論を導き出した。

①著者宮島吉敏は正確で、より理解しやすい北京語音声を表記するために、ウェード氏のローマ字表記、注音字母、国語ローマ字の四声符号などの良い点を取り入れ、当時の北京語の発音を忠実に表記しようという工夫を凝らしたと判断できる。

②単母音 a、介母 i、「撮口呼」u、鼻音韻尾の改善から、昭和初期の日本人がどのように北京語の音声認識していたのかを考察するのに役立つものと考えられる。

③従来の北京語音声教科書より正確な仮名で表記した『支那語四週間』は、最も優れた北京語音声教科書と評価できる。

④著者鐘ヶ江信光は『中国語四週間』を改訂する際にローマ字表記、反切注音、注音符号、国語ローマ字、ラテン化新文字の良い箇所を参考にし、明治時代から昭和初期までのものと全く違い、新たな北京語音声教科書を作成したと言える。

⑤『中国語四週間』の四声、変調、アル化音、多音字の改善から、昭和中期の北京語音声教科書はすでに現代漢語に近い。

参考文献

- 広部精 1880 『亞細亞言語集 支那官話部』 発行者 青山清吉
田中正程 1885 『英清会話独案内』 昇栄堂
川崎華 1885 『英和支那語学自在』 発行者 川崎華
鄭永邦 吳大五郎 1888 『日漢英語言合璧』 発行者 鄭永慶
宮島大八 1900 『支那語独習書』 善隣書院
鄭永邦 1904 『北京發音反切表』 発行者 田中慶太郎
西島良爾 1906 『最新清語捷徑』 青木嵩山堂
足立忠八郎 1909 『北京官話日清商業会話』 金刺芳流堂
鄭永邦 吳大五郎 1910 『日清英露四語合璧』 発行者 島田太四郎
飯河道雄 『官話指南自修書』 (全3冊) 大阪屋号書店
『譯註、聲音 重念附 官話指南自修書 應對須知篇 使令通話篇』 (1924)、
『譯註、聲音 重念附 官話指南自修書 官商吐屬篇』 (1925)、
『譯註、聲音 重念附 官話指南自修書 官話問答篇』 (1926)
宮島吉敏 1931 『支那語四週間』 大学書林
鐘ヶ江信光、宮島吉敏 1953 『中国語四週間』 大学書林

張照旭 2014 『明治期中国語教科書における中国語カナ表記についての研究』 岡山大学 博士論文

孫云偉 2019 年 『明治期北京官話教科書「官話指南」及び学習補助教科書の総合研究』大東文化大学 博士論文